

# スターリン余話

石井 豊喜 陸士56

始めに

昭和20年8月15日は終戦記念日であるが、同年8月9日、日ソ中立条約を破棄して満洲に侵攻したソ連の独裁者スターリンは、巨悪の政治家として西側陣営からも恐れられていた。

筆者は終戦後4年間シベリアへ強制抑留された苦難の体験があるので、昭和の歴史上の人物として、彼を抜きにしてはロシアを語ることはできないと感じている。

## ●スターリンの実像

スターリン(ヨシフ・ヴィッサリオノヴィッチ・ジユガシヴィリ)は、旧ソビエト連邦の指導者としてばかりでなく20世紀・東西冷戦期には東側の権力者として著名であった。しかし、あまりにも大きな権力を掌握した個人の独裁が恐怖政治の悲劇を生じさせたことも事実である。

スターリンに対する評価は時代と共に変わり、1953年3月5日死去後、「赤の広場」にあるレーニン廟に遺体が安置されていたが、1961年の第

22回共産党大会は満場一致でスターリンをレーニン廟から追い出す決議をした。その後火葬に付されて、廟とクレムリンの壁との間にある墓地に埋葬された。だが、ソビエト70年の歴史を振り返る時、スターリンの役割は大きく、今日のロシア連邦ではスターリンを評す声は少なくない。

スターリン統治下における農業集団化・工業化の過程で莫大な数の犠牲者が出たことは疑問の余地が無い。しかし、国際的環境上、スターリンの対外戦略は、社会主義国として理解されている。冷戦後から四半世紀を経ても、ロシアの行動は、ウクライナ問題その他、やはり西側とは異なる面で注目されており無視できないのである。

真実のスターリンの姿を語るのには難しい。バーナード・ハットン著「スターリン」(木村浩訳 講談社、1989年発行)によれば、スターリンは1878年12月18日グルジア(現ジョージア)のゴリで靴職人の子として誕生した。幼名、ソソ。青年時代までグルジアで過ごしたが、母親のお陰で神学校に通い学業を続け、よく勉強した。当時のロシア皇帝はグルジアの

民族解放軍を弾圧していたので、スターリンは次第に民族解放運動にこがれていった。そして、反ツァーリ政府運動に参加するようになり、暴力革

命の資金を得るため企業を襲い、秘密出版も行なって警察のおたずね者として目を付けられたが、その一方、革命家レーニンの注目も得た。しかし、活動資金を得るための売春宿の運営については注意の手紙を受けていた。

1914年8月以降、大戦の不利から革命の機運が高くなり、ペテルブルグのソビエトが拡大し、臨時政府が成立した。暴力革命家としてレーニンの知遇を得たスターリンは、理論家のトロツキーとはそりが合わなかった。

1924年のレーニンの死後、ボリシェヴィキ党は武装闘争を宣言し、スターリンは1935年、1938年に大粛清を行い、国家活動家383名を公開裁判の後銃殺刑とした。なお、実際の犠牲者数は2,000万人とも言われ、また農業集団化では無名の「富農」の犠牲者は数百万人と伝えられている。

1936年には新憲法を制定し、人民委員会の議長(首相)として対独戦争を指導した。また、一国社会主義建設を推進したが、一方でコミンフォルムを組織し世界の共産主義運動を展開していた。

1953年のスターリン死後、後継者フルシチョフは第20回ソ連共産党大会において、スターリンの思想と政策及び個人崇拜について批判した。この

秘密報告は各国の共産党に衝撃を与え、後にハンガリー事件や中ソ論争につながった。またソ連における批判推進派と保守派との綱引きがその後続いた。

1956年10月、日ソ共同宣言により日ソ間の戦争状態の終結が確認され、国交回復が実現した。

1961年10月の第22回ソ連共産党大会で、スターリン批判が再度行われ、スターリンの遺体は赤の広場から撤去されると同時に各地のスターリン像も除去された。弾圧された人々の名誉回復も行われ、その数は5、6百万人に及んだと言われている。

## ●ソ連の対日政策

スターリンはヤルタ会談に基づき、「満洲、北緯38度以北の朝鮮、樺太」に加えて全千島列島及び北海道の釧路と留萌を結ぶ北半分を要求した。しかし、米国トルーマン大統領は千島列島については同意したが、北海道の分割は拒絶した。スターリンは対日戦争の勝利を祝うメッセージの中で、「日本がロシア革命後に軍事干渉をした恨みを南サハリンと千島の領有により雪辱した」と発表した。これはスターリンの古いロシアのナシヨナリズムと言えよう。

先の戦争の終結後、スターリンは満

洲・樺太・千島・モンゴル・朝鮮にいた日本軍將兵と一部民間人約60万人をソ連各地に連行して強制労働に従事させ、約6万人の犠牲者が生じた。これは明らかに国際条約に違反する行為であり、人道上の問題でもある。

スターリンが行なった粛清は、史上稀にみる大事件で、冷酷非情であった。

第2次世界大戦前夜の1937年6月11日、モスクワのルビャンカ監獄でトハチエフスキー元帥をはじめとする8人の赤軍の最高幹部が銃殺された。

罪状は「陰謀による反革命活動」である。

赤軍内部の裏切り者に対する大量殺戮は、高級将校だけで1、500人に及び、スターリンの敵意は関係する家族をも処刑した。また、軍法会議の判事を務めた將軍達も、後日逐次消されるといふ、巧妙悪辣な手口であった(『赤軍大粛清』学研文庫)。これはスターリンの狂気と言っても過言ではないと思われる。この赤軍の弱体化は1941年6月のヒトラーによる攻撃に対するソ連軍の敗退として現れている。

晩年のスターリンは猜疑心が病的になり、革命期の同僚を一扫しようと考えてるようになっていた。

1953年1月、側近の有名な医師たちがスターリン及び党幹部の暗殺を企てたとして医師団を逮捕した事件があった。

また、スターリンの側近ナンバー2として信頼の厚かったモロトフの粛清も準備されていたが、同年3月5日のスターリンの死によって辛くも免れたのであった。この「医師団陰謀事件」はスターリンが直接監督するようになり、政治的な緊張を考慮して幕引きとなった。内容は不明であるが、医師たちはシオニスト(ユダヤ教徒)であったと伝えられ、科学・文化面の引き締めが目的で計画されたと推察されている。

●ソ連の崩壊と作家ソルジェニーツィン

1985年にゴルバチョフ書記長が登場してペレストロイカを進めその結果、1991年12月にソ連は消滅した(CISS)独立国家共同体設立)。

従来のソ連社会では、人間関係で密告、中傷、裏切りが横行していたが、この卑劣な行為はペレストロイカが始まってからも無くならなかった。しかし、ソ連の現体制の裏面を痛切に暴露したソルジェニーツィンの作品が海外で発表される。その文学的価値のみならず、人間の真実性を追求した傑作として世界に衝撃を与えた。それが処女作『イワン・デニソヴィッチの一日』である。また後に大作『収容所群島』も発表された。結果的に国外追放となつたソルジェニーツィンは、旧ソ連の崩壊の端緒となる道を拓いたのではないかと筆者には思われる。『収容所群島』には、スターリンによって創出された非人間的社会の一部であるコルホーズや、ラーゲリ(強制収容所)の日常が克明に描かれて、1970年のノーベル文学賞を受賞したのである。

『収容所群島』の真実性は、作者自身が群島に関する227人の回想や手紙を基にして革命後のソビエト体制を告発した、と語っていることに裏付けられている。そして、スターリン体制のイデオロギーにより出現した地獄図は凶悪犯罪とも言えるもので、第二次世界大戦後多くの日本人がシベリアの抑留生活で苦難を体験しており、筆者的もその一人であったので、実情は熟知している。

●スターリンの現代史への影響

スターリンの覇権的専制主義は世界史の流れに逆行して、東西両陣営の間に冷戦状態を生み、コミンテルンの赤化戦略はソ連の崩壊により敗退した。しかし、大戦後人間解放を目指した社会主義の革命は、自由と民主主義の政治体制の流れにより変換するまで東欧を支配した。スターリンの大粛清による専制大国主義は批判されたが、共産主義国家となつた中国・北朝鮮にお

ける一党独裁政治の手法はその後、毛沢東や金日成の政権で活用された。他方、ロシアの大統領プーチンは、KGB(国家保安委員会)の中佐から大統領という頂点の座まで上りつめた政治家であり、軍事力と資源力を背景にした独裁的強権を發揮して、国際舞台に登場した。グルジア紛争やウクライナ問題などを視ると、ミノソ連の復活を企図しているようであり、プーチンのトップダウン方式はスターリンの亜流であるとも言えなくもない。

●スターリンの歴史的評価

1953年3月5日夜9時50分、スターリンは74歳で死去した。彼の死の報を受けた多くの国民は衝撃を受けその死を悲しんだ。西側の報道機関も、偉大な指導者を失い茫然としたソ連国民の姿を伝えた。だが日時の経過と共に抑圧政策の見直しが行われ、脱スターリン化が始まり、一方彼を擁護する者も現れた。フルシチョフのスターリン批判報告は有名であるが、スターリンによる工業化・集団化による犠牲者数が数百万人を超えた。しかし、第二次世界大戦でドイツに勝利することができたかどうか、共産党の政策を含めて、スターリン個人の評価については賛否両論がある。

スターリンの性格上巨悪の政治家であつたことは間違いないが、対外的戦略の上でロシアをアメリカに匹敵する強国に押し上げた評価は与えられるであろう。従つて、歴史上の人物としてスターリンを語らずして現代史を明らかにすることは難しいのである。

### ●日本共産党へのスターリンの干渉

1949年頃、スターリンの「アジア第二戦線」構想と称するソ連駐日代表部の内部報告資料で、『日本共産党研究』があつた。その中に注目された人物は、日本共産党中央委員会政治局員・書記長の野坂参三である。報告の著者はK・セシキン大佐。

野坂は中国から日本に帰国する前にモスクワに呼ばれて、赤軍情報総局の責任者クズネツツオフ陸軍大将と会い、NKGB（国家保安人民委員部）と情報連絡する任務の負託を受けていた。要するに、ソ連のスパイとして日本国内の政治・経済をはじめアメリカの占領政策他の情報を提供する等、日本共産党中央委員会政治局の内部資料以外にソ連共産党の立場を考慮した勧告を提供していた。

従つて、スターリンに対する報告では、日本共産党の路線転換に影響を与える人物として報告されていた。野坂、旧姓岡野は、日本共産党の活動家とし

て、米国の占領政策を批判するマルクス・レーニン主義による武力闘争を提起して注目されていた。だが、スターリンの頭の中には、武力闘争により米軍の後方攪乱を説いても、その国の国民生活向上についての配慮はなく、全く無責任な干渉であつたことを忘れてはならない。

（以上の日本共産党に関する記述は、『スターリン秘史 第6巻』不破哲三著、によるものである）

### ●朝鮮戦争でのスターリンの役割

1950年6月25日、朝鮮戦争が勃発したが、北朝鮮の金日成が訪ソしてスターリンと会談したのは1949年3月であつた。

スターリンは、それまで南朝鮮や米國を刺激しない態度をとつてきたが、金日成は「南進により南の人民の大量蜂起があるので、勝利を確信している」とスターリンに説いて支援を要望した。スターリンは、南朝鮮の実情を調査した後、1949年8月〜9月頃、「アジア第二戦線の構想」に基づき従来の消極的考え方を大転換した。当時訪ソした毛沢東は、スターリンに中々会えず、モスクワに滞在していた。

問題は、中ソ条約、借款、貿易協定などで、スターリンが毛沢東に不信任感を抱いていたことである。

1951年1月19日〜20日以降、スターリンの決断により中ソ諸条約も交渉が進行した。理由は『毛沢東選集』が漸く理解され、中ソ新条約の締結により同盟関係が生まれたことである。

結局、ソ連は中国の支援をあてにし、時間をかせぎ、北朝鮮の支援の準備をしていたのである。一方、金日成はソ連と中国の首脳と会談をしながら、アメリカの介入について楽観視していた。

1950年6月25日早朝、北朝鮮軍は38度線を突破して、「南進」した。

国連の安保理は北朝鮮非難決議案を出した。ソ連代表が2月以来ボイコットしていたので、ソ連欠席のまま、国連はマッカーサーを司令官とする米軍を国連軍として、日本から釜山に上陸する決定をした。

朝鮮戦争の結果は周知のとおりであるが、スターリンは国際的パワー・バランスについて、米國がアジアにおける戦争で疲弊することを狙っていたようである。我々は、スターリンの戦略的分析と、欧州の力をアジアへ向けた判断を見逃してはならないであろう。

だがここで特筆すべきことは、朝鮮戦争の中途段階で、中国の義勇軍の大量介入により米軍が敗退したことである。そして、中国本土攻撃を主張した

マッカーサー司令官は解任され、米大統領トルーマンはマッカーサーの後任にリッジウェイ中将を任命した。

結果的に、朝鮮戦争におけるスターリンの策謀は、中国による米國の勢力削減と、日本共産党に対し米國占領軍の後方攪乱を図る目的で、日本共産党に干渉したことであつた。そして朝鮮戦争が長引いたが、1953年3月5日スターリンが急死したので、同年7月休戦協定が成立したのであつた。

その後の中ソ関係は、朝鮮戦争で中国軍を支援しなかつたスターリンの背信行為により、決定的な溝を生じた。

### 終わりに

スターリンの覇権主義の歴史は、ロシアの公文書の公開により逐次明らかになつてきたが、その「巨悪」の全体像の研究は未だ十分とは言えない。

世界の平和的發展のために、資本主義体制を乗り越えたい社会主義運動の潮流について検討することもまた必要であろう。

（3月26日 記）